へ 5
92
1

利
門 号 92
巻 1

浮世物語上

世の中にちらなれむ人の物語のはじめしは
ハふと思ひしぬ和歌のうしろもおもふてきたりまて
あやしひおもひあへどもいでぬることの葉なり
とくおきて長者とと云ハ此世の下に住しめ
おとなしハ人の耳にもふかうずくハ一夜の
経をも八徳にとたとえたれば我わりごとに思ひ
くちをしき花のきわざる覚へし文字がなし
よくの人のうへハ待て見ゆるが山道は
まよひぬることしき見ゆるひとは法師なり。

大和哥のみちは昔より代〻のみつめに伊勢の
海のなぎさのまさごの数くをみつき。和泉の杣木の
きれくと言の葉をたくし侍りしといまにしるしとよ
めしずつね哥も拾ひしもの侍ら先をきよ
より為入ぬれば清くぞ山のごとくもかのもれたく
のこりてかのゆゝしさのをおもくて侍りぬところよ
和哥の道は天のうき橋のすゑ遠く世〻につきて
聞きし人のふるきをしらず侍ればこの流るる所のたより侍
らんつゝねありて玄旅もとと万葉集よ書集しも末
代となり拾せんぞうれ末水無瀬河よりあつかれしいても

色をそへたつ〻める月よをかあり侍りかめのし
らせあまりの末たりし。世よふるりたれ好色好
こいでゝ盛よをてるやし侍よりみ席をまけり
なれる人のあるんし末よ名のきこしまをあね。波れ
代よ独吟さ色ねとのこりてひめさすに秋もをを
がしれ床の末をあらしめて。様くのみの光をさ
がめおしらぎと一代のかけなれば光もうすく
や侍らん。於其二条の名もき〻それは代よ枝哭
きあこのさよ拾がせる。莵玖波集とよくいみじき
をあぐれ流をたくしてかのめを紀ありこれ

たゞともし火なるべき物に侍らん。かのはゝきゞの
言葉は古今集にまさりて心の光はおほかれくも
食をとけるちゑのはしにかざしの粋を述べく
のかたりにもはらめて戯れ言を物と見て侍り。
志のふかき道と申侍る殺より君じふかき物とな
りと侍れやさればしるべなれはなむかくのことく
まつりにかなり侍とれ。又あれは心も申侍よ
里志れくもり侍りしけ給ひて侍りを物語
あるに侍らん。古人の侍りしは世流の文には
代々においてふかくへるをおもく志たる哥の員数

をたくしていろ〳〵けれ。さ侍くれ深きをお
しはかくときはあれ世よらぬめぐさぬしても
ひとへに流れ川となりて侍りし。志のはなさきと種はくな
のきがれ深きの心ちりぬ。ともの葉の露も色々ろひ
むかしは白とくなくなり侍とあん。それよりこの
かたひさすしれたとそてあさちりに物ゆきし
を。源の金吾と冷泉の黄門よつきあひて後の文
しくしたをまなびて。いかにしへのよきをまなう。
和哥の道をおこしたまへとおもりかの歴より
しきた和尚むきれあひてはとれたまきより

さらきまでおとゝの林の花くを尋ぬる心の泉(いづみ)の
庭(には)を清くしてわらふより出(いで)くる氷(こほり)のごとく流れ出(わき)
深(ふか)さを照(てら)しなりかの光や広(ひろ)がりしからざるをも
むかしの歌のあつめることどもをも世(よ)によひろく世
流しうりなる事侍しなん。
枝葉(えだは)ばかり見より古今(ここん)集のことばの文(ぶん)と申つ心(こころ)あ
いの花を咲かさひ侍に、古山(こやま)のうしを河辺(かはへ)の鷺(さぎ)の
ごとくよ見て侍りとなん。清とちかひも雪(ゆき)侍らん
先達(せんだち)の申し侍し。誠(まこと)よいのれるひがめみし寂道(だう)よこ
そかりて見て侍る。昔(むかし)の人の言葉(ことば)ともにもお(まへの)
句よ仮名清くし又五(ご)輪(りん)相通(さうつう)又五(ご)音(いん)連声(れんじやう)れ
どまぐく四つらし侍り。中(なか)つ清よりいひよ今よ
前句(まへく)の心をば忘れて只詞(ことば)よりて花をもみぢ
とおぼえ侍ると見てしかりけるを道ばつきざれ
不知を月花(つきはな)雪(ゆき)をのこおもべきを、けちきざれば前(まへ)
の句(く)よ心のかくよはされしば、すこしむかしき人の
いにしへ侍りぞれてなひぬさる如くし。
お前句(まへく)のかりよらにすぞゆのぞのわり行たる
なる詞(ことば)もあらぬらう書(か)きものあはれ如何侍るよ
昔(むかし)の人の言葉(ことば)に、中将(ろう)のやさ深かられ侍とふ

いかに待やらん古人の句は詞姿をばかりに
よませて心をふかく付るとみて作りおぼえの
初捨の心しらで作り字来は詞どもとと
見分て付るやうを知りといへり
流し竹の丈こや人のいり衣 定家卿
一夜さへ何けぬ花さへ下ぶし
此法の和歌しも大宮人より衣付どもとつ中将
むさしの文すがにかくれ見し
岩代のまのとどろに音づれて 順覚
うかぎきたりぞもやいひ待らん

さか姫のえとき山にまよかほとく
かせわどるきこそねぬ雪 家隆卿
さかひめかつらきおしとつ中絶
むすびの神よりすまでいのらん
いくかさくもまつね様ねの葉まくて 信照
神にいのりもおちらるなるべし
吉野山二よひまにぬるりもの
やしのみちつとりとむらの色は 後鳥羽院
よし野津のむそやいひ待らん
舟あぐ浦る宿ならの桃

うき世乃ところまよふる大かたに　周阿

舟ならふるかなるべし

軒のまこそ夜とあれしかな

籠めたるとむすびやとらん数ぶる　十仏

軒の夜かなし老の寝覚の床

うれしきもしるき妻とこそすれ

ゆかしき人の枕じにおきし捨ねして　良阿

ひとへになれの涙と申須くや

るたどろきて人さらくなり

ある川の岸にあされるきし舟　救済

るにやとぞ申。此等の名句ども前の句をとて取りしおきゆへにむかふく付侍り。最上乃透逸ならぬかくれども句のすがた不可勝計。ちゝるとにいひ侍しど

何ても此頃は幽玄躰を中々見ぬりとあて流
る事也行へきよしめかし
古人語侍るは。いづれの句にも心をこらすべき深き也
も此頃の昔り給用なるへし。されども昔の人の
幽玄躰と申しるもの大やうれどにかしぬ事へらぞ。
遠きかりしるやうに覚て侍とかん古人の躰

眼(がん)とやをけるハ。紙紙完用(ゑんよう)とぞしるや。春
やうれ人のもろそうか。姿(すがた)のやさしみしま風の
えんなるにハ入がらむの道。人ハ姿(すがた)を納(?)ゐるは
法人(しよほん)めりけり也。紙紙わさなるか。一人(いちにん)ありべし。され
バ古人(こじん)の最上(さいじやう)の幽玄体(ゆうげんてい)とこへ。紀貫(?)だり。此
にやゝなりや侍らざらん

秋の田のかりほの庵の苫(とま)をあらみ我衣手(ころもで)ハ露(つゆ)にぬれ[illegible]
俤(えび?)ぞ今ハうつゝ[illegible]とくしても[illegible]んとぞ思　天智天皇
長き夜(よ)[illegible]うらみ人[illegible]わかれんとすらん　伊勢
山里(やまさと)と夢の籬(まがき)にさそハ遠(とを)く人の袖(そで)ハ見てまし　好忠

さ此の源氏(げんじ)さやうなる道殊にして上手(じやうず)なれハ　人丸
[illegible]やさハ[illegible]まり逢(あふ)ことを夢(ゆめ)にまかせてそ[illegible]　定家
[illegible]わかやくのあかつきの積(まつよ)[illegible]の月　同
誰(たれ)ぞ[illegible]めて[illegible]くるてる人く庭(?)に[illegible]のかく　慈鎮
滅(めつ)食(?)とも今(こよ)ひの別(わか)れ完用(ゑんよう)めりくべし
かれくぞ家(うすき)り花のあかりひきて
ちこゝろく[illegible]月夜(?)に鳴(なき)らく
夕暮(ゆふぐれ)のさびしきを風やさそふらん
[illegible]の句の[illegible]ひに[illegible]の人の[illegible]ハかハり[illegible]なく
[illegible]もてる[illegible]也。滅[illegible]らう[illegible]なく

爰にしば此句のさまにして又秀逸侍れり
いゐ清らに花の盛もち紀ぬらん　救湖
いたおく花が袖に月の詠らん
故口の一むしすきの本心ふみらく　曰
かく此くの句いま紙ざ里の口より八出るるや
侍らんと又まことの合なるべしと又まぐ俊
しき句みもこの世ににあるべしとられん
ねかうの八紫とも葛れ花の清
常もとのハつ孫に吉備を趣きうく
乙おのの句ハ心人承居めてき無下の人のさの世

ちり志やくめいきよりるべし
みとりみれひさひよかきれ文字代とよ　良何
いまり名の谷よあのつき月り　秋　宗
此句を是又おそりれ趣之諸よ自讃の句だなるとや
古人の自讃乃ことかく
見まうに此風あるく樹母あり郡も今や夜寒ぬらん　板
思ひある折々紫の夕煙むせぶ涙に見るよ　曰
桐乃葉しまかずく蛙よおりの形も人を待と思ふ　由
これ等しも空あられ秋風よりくおかめても　曰
いさ見何今もん此の見れ宗所作して物を思へとは　将

見ぬ人の何人かのきゝはらんあはれをしるや月ぞさやけき　慈鎮

み山路やいつより秋の色ならん見ざりし雲の夕暮の空　同

浅ぢ生や袖にくちにし秋の霜忘れぬ夢を吹嵐かな　通光

しめおきて今やと思ふ秋山のよもぎがもとに松虫の鳴　俊成

ありしにも時雨は袖に秋かけていひしばかりを待とせしまに　寂蓮

うら枝さす初秋の色の霧もなし風ぞ身にしむ　同

大淀の月はさしもぞいるなみに松つくも嵐吹けり　有家

春の夜の夢の浮橋とだえして嶺に別るゝ横雲の空　定家

年も経ぬいのる契ハはつせ山尾上の鐘のよその夕暮　同

昨日だにとはんと思ひし津の国の生田の杜に秋は来にけり　家隆

見ん人の月ハ淡路の秋風に露やあやしき末の木枯の風　同

うす霧の立ちよる方のまさきの葛ちるを見てしも山　雅経

葛城や高間の桜咲にけり立田の奥にかゝる白雲　蓮

木枯やいかに待みん三輪の山つれなき杉の雪折の声　具親

見し人もまだ見ぬかたの隅田河すまうにかよふ　秀能

津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風渡るなり　西行

年たけて又越べしと思ひきや命なりけりさやの中山　同

此外の歌どもいひしらぬゆゑをそへても右上秀句と

えらばれしうたどもなりけり

心詞たくみなるゆへにさまでことばをしるし給ふ

みづからの名字をもしらせず。此のさうし
はへ侍らんはむかしの螢雪とあつめずや
は侍らん。八雲の御抄にもことにいへるとて。
あるひは天竺もろこしの文をはなれ世の
ど。唯万葉古今集伊勢物語などの詞を
用ゐるまゝにのえんに綱の字さう記て。源氏狭衣
なり。実にいとをかしも寛はざしん古人に
もて下のもとは古人もや侍り。万葉集をはじめの
うへの人は句にかくて清く心得ぬ物
とてもておぬる猶なり。梨壺まで

さるはおしはかりこれる女房などもまでて
みな物としてそや侍る。さ候ぐめてしてぞんな
れ共ごとよなく侍とはなり。寛弘は寛平の後
の者にはとらけばなでありたまはりけんと夢に
や侍しと見ん。万葉の歌と見ゆし。彼の此の詠
古のみさ候く志るし給へるに此二となせしと
世の人よやうには容たるうる女房の字とまれ
ひくき後に侍せられる神の一色の神なしとまる
ぬべし。又彼ははそ。大神とそしとを申せる
神。長高神とてさもく座せしるをを留るひ

是をよくはのみて鬼とせひらじ神をまなぶべ
しとなん。彼の鬼とせひしぐ神を奇也中ぢう
せ中なり。されども是を世上といひて世の見なま
ありまゐべし。ゆるしぬ人ハまれにてめづらし
とそびしき人の釈とわれん。さのみやさしみ過て
又あなかし。例の平懐の句なりとさしとられん
中古へ歌連歌ハ花と実とをならべて学まなぶと
見て侍り。古今集にも実ハされども花ひ
よりさえよるせいふ文人の花よぬゆくとも色
也文大も稀えんともしと奇とあらぬ如べし。

とも、いつり、彼古き花玉にかりゆくもそのしるなる
てとぞく。是を沈ぢにいかなる待も、いつの世にも実ハひ
とへも沁しらざる也ん。かく山里に来ぐわんがとあらむ人
待。奇を奇ありて奇とよめハいさ花そんしく侍ぞ
中。彼をぬ晩花やすん。実達語侍しハ奇とに
くらんずる作者の晩りてそがりかなく諸達。
うるも秀歌をもひねとされて、ぞ面影をうつしては
含蓄ありまや。割よくしき消とても鉛光吟じ
合せせ中侍り。古人の句ハ奇ゆ面影をあらはし
よ是れさけらうそへるハいゑねやえて侍りぞん

よう辞の哥とくさまて百韻五十韻とし侍
かれハ露がうりし候なれバ如くべし。千萬ま
哥の姿ならぬひ志てねぢ哥の眼ハ入せぬ
ふ津うかあるべきをきしるうる物ゝ如り侍るの哥へ
なきりる人の歌も侍りハ発句ハおもし長こう本
やうれすくと一ぬしみ侍る。本辞とし侍らハべ
きれりや。俊人の発句し侍し。誠に発句ハ哥風巻頭
まきそへる句々て侍るハおやうにゆうくと
さしのびるおなるべし。然じし撰集なども
ありけて侍る。百韻五十そ以下の巻頭ハ同り

まりてこにより侍と見へしまり。様々の風情一すな
らを発句をたれしさ説すく聞く程くのうする
きハ一花そのを作侍らんもれさくをうるなる絶
し。古への発句ハさのこ姿を盡し沈思せしとハ
見て侍しぼされた一本とも尚すれあらずけ
此ハ巻頭発句とて花のをを世よをてこのつゝハ詩
きハ作らんれば深しくめて。人の句よい合せ
と名くよ如り侍りや。巻頭らしきも文辞三び
うつ侍とらん。巻頭哥
いふかねて大方の網よりみてと見ゆるをさとさに小太郎

しら露もきさらぬなりよろしと云も家の立と見えたり　定家

八幡山こゑの夜風やさしてこゑもさらぬやまとに霞なり　山樹

たぐひしく秀句

なげやらず都と落の空のかなしきかな　大閤

今しばしとはるゝ霞に見えて出たるし　同

雨も嵐も人の名をぬさの手向なる月　救済

あすからは花も日のひかりはしき　周阿

明人の人の中に秀句とこの言語をもがし

よきいと。秀句と古人も歌のいのちといひ

侍りけるも嫌べきにあらず。しかるの名誉その

秋をしらずといへば上極のむかしならとしも造る

ぬ所の中ら又練よりきまりて曲と秀句とのたまふ

人なりけるへしてひとよく吟じえて侍るなるは

さるや侍らんとなり

まに結ぶ黒井の心のはてのとまり海も見えず　後京極院

黒鶯の今に花のにしかも霜ぞ同日の影に羽を鳴かり　土御門院

さしてたる富士の山の岸するにちのをみせて夏はしるらん　順徳院

冬よ立ちは秋よいてしと雪のすきま蒙の窓よ秋はあらた　後京極摂政

こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくや藻塩の身もこがれつゝ　定家

いはくみると秋は霧とも夜目も夕雲のそぬの傍しま　同

風かほる小河の夕栄ハ江夜ぞ夏の夜しかな　盛澄
天川秋の一夜の契ちぎりとも此ハ霜のねやや鳴く人よ月
此歌の名寄あるナにいとゆかしき　同発句
たのしみちらちるもりまいつる宮井の紙　敷衍
きつねの化を用のとは世を色の外　同作
凡秀句なくしてハ奇異なる事のみぞ。されば今
とや作しぬれど秀句よからざれど凡俗なるす
秋風しとれんぐが別家の用なるべし。又よろこぶ人のや
待はうたくしくすれば只宝とられる弥を上上
のやうにや合。さやうの句は採用すまじく

くやむ大事を化かにかくしくやうさんまと
あのたなるしかばあとにさん俗の車の化あるは
しかれども家をおもしとすれば人の句のを
もとく我ちりしとのままぬやうすかり作りや。定家
郷ハ虚のうかに悲しき文人の歌の句と申はる文
りはかしぬまとやさる。故ハさはくいふら
修りまうにもりづきなかへし。古人の言ハ
どちは多ゑ人作り也好上手の天性骨とえて
十首とまさるなるべし。水精の物ハ瑠璃をとり
そるやうにといへり。是ハさもく清られとぞ。

孤者のあやめもわかとうけきにやうにとハいはねて
としのびたるも。大内裏大極殿の高座に独出
てたぞうてねたうにと又法如くし。大なる時ハ虚
空もせまくちいさき時ハ芥子の中にも入ある
やうに浄飯浄眼の神変のごとくなどいへり。
詩にも賈島ハ座せるうり。曲肱にもむしといへり。
足のねいさもりハ奇ハ。飲食供奉の間も詠吟すれ
ハさもしとや侍り
風狂つゞ文俊成にハ奇なるさ波を念法に為給ひし
おとなにハ。我奇三そろぬ法まそハやれうにいの

ねむれもよろしき哥ともや侍し。狂にして世の聖ま
もしるつるやうに侍し。定十ちの法よりハ骨さらに
えんなるさをもれく覚侍りぬ。さらにやかくの人
の耳ありいも侍るとおもりぬ。我奇のまとし彼
まぬり侍ことなりやうに深切にもまくのへ侍らむ
て逸文にしたのみてもひ給し。俊成なる中まへ来
とらんハあしくて宗給へ拠られ。彼の奇を棄
老もちらく。いふも侍り。我奇ハ安楽にか
ならぬ。それをは歎給へりす。我いかれそろね
たすく肉をのこよかり。彼の天然と骨をえる

黒海(いかり)の哥ふしやましき身毎(まいく)さされた八十(やそぢ)ちし
扨今よりもまれていろ侍へしと下京ちろ之
となん物まへ第一の(まなけうひやう)弟一のまくへいろにもしまくを
法のり結びて世一の人まちたしとて源(みなもと)をなりしぬ
無るとへいかなる得よりの人へなりてくま祝言(しうげん)をも
うして発句(ほつく)にも おねまへ(ず)し歌成ひろめかうしめ
よまり侍りし。
此翁ハ平(ひ)生(しやう)常述懐(じゆつくわい)を心詞(こゝろことば)の旨(むね)として哀(あはれ)なる
おとを云ふれしけれ前えびを鬼(おに)のますれた
の心はも屋のうけざるさきの中れたとり

をとすゝめ侍べきよ悪(あく)めへれひ一座(ざ)まごに定(ぢやう)よ
ふまり名(な)をめでし千(ち)よ世万代(よろづよ)鶴(つる)亀(かめ)翁とぬれし
ひかどのひあそんこそうして侍れかくいろひ侍て
てべつまの人の百とせ雅(えん)の人の千年(ちとせ)を延んみるは
さらへ今日ハおとな翁(わかさ)よみし夕(ゆふべ)の煙(けふり)となるぬ
なし。ひろましひろるみをとへをよろし経れしは
みしへの哥人(かじん)ハ述懐(じゆつくわい)を常とも…し侍を
詩にも杜子美(としこ)一生(しやう)のうれへと見ゆ法花(ほけ)にも
此経(きやう)をわきまへめんとなら世間(せけん)の夢(ゆめ)を観(くわん)ぜすと也。
志らハあまへ…の和(わ)哥(か)所(しよ)とざ後の会席(くわいせき)禁忌(きんき)の詞(ことば)

むさと人まかせにばかりみれば紙の人さとりさらん
と史おもとて侍るにゆへしぞ。
御中かりの一座にひ侍はるまで選どもおかれ
郡は退散し侍るこれから騒も時うつり侍
きいつねなしぬやうに侍ずめく人侍るは柳り
あるべきやうんは人の結縁し二味の大閤さ後など
のやんごとなき御一座ハ毎く翁より深更に及
しる也。それもしらそ侍るも明天より日晴にい
きらん一座すへむなくても侍しそぞやに侍
そく終満座の人をもしろらせ付け侍人の

沈思してもいつの中にかのる侍るごと後かはり
わんしう侍も目まり也。沈思の人の句中くる
とえども也と申也。詞ハ心の浅うひとし侍れハと
まつれ人の胸中侍るさなくさかしくこそた
知く侍も秀逸と申べくもなくおなじ引のまり
侍しぞやそもはやくえんまのぞめるく世の哀と
もふかくおもひ遠者侍人の胸よりいづる句なかせ。
侍也ハ一字二字の替也。其れゆうにさけやせさむ
くらうく終いつねハの句ひれあるの閑人の口よ
里おる物なり。後京極摂政御前

人すまぬふはの関屋の板庇あれにし後ハたゞ秋の風、
此あれの二字ハ昔より玄妙不可説の事に侍とか
や。彼ひとしき和尚も極にをしへられし。此二字
彼流胸にあけることにあるべからしやなと郷
語ひしさてハ酒よ人気と付ても源との境之境能
の人の句ハ心をつけて胸より出る気ゆへにや心をもう
流重日に蓍侍りや。ふ隠の人ちかの句ハ言のとより出
ぬるゆへに行時なるらん。耶ハわらりて耳ハあきら
ゆへに達老にのとなる人をき。一の弁をとこゝろをとこめ
て悟りをおこし侍らバさとりに至るべきやらん

先達の糟粕しハ大旨いづれの弁をとをてけらん
とまそりしも此人をはゆ侍つめぱいとりにまま
のことにも其語ふぞそまゐらへとまさやまへ侍らん。
君子ハ周して比せず。小人ハ比して不周とかや。偏く
夷叔斉ハ聖の清也。伊尹ハ聖の和也。孔子ハそ時
なるやといへれし。仏とこそ両足尊とも侍る。三京
の心ハわけなるべし。
此道先達をあるく学ほもちるや。座くの人の
詞をうくべきにて侍らん。ところかるゝにあるべき
とあるく新を志ゝ道をとたるとのわけざらん人の稽

古語もハ中くにまなぶべし。邪なる心を除りて
後いりの汚代賢聖にあへるとも捨るべし。人の
心をハ深の桶り豊き持らぬ白きとすぢなるに
して侍り道をまもりてさぬぐいつる物ぬべし。佛
法をさとらんにも善知識者是大因縁と云。知識常
無種佛種従縁起といへり
此法又八の上手あまりしと唐人の或人まれりん
名をそよわきまねとなん。たや咲きくるやと言ひける
まことに咲き侍るや。扨ハそしへむすけひぐらし
といへるこそ誠に深り面白き侍し侍る。かやうなを

あしき心に入る。六のすれなきにむべきよりを知
なるべし。さてハ友を為人を知るにまや。大方の
に任せぬように侍れバいづれの友のある人にま
じらんが力なきよりし也。されども萬のたぐ紀
友にまみゆる宰用なるべし。いづれら志あり
来る客にも心物ねかしくおかとけぬ人
の一夜容も交侍るバその一座いかぬかくや侍らん。
子献ハ安道を為てしの外掉をもちと興つきて
俄とく安道にあひさるましてそなたけかく
ねなし侍る。父母の三その讓をうべし。ゆことに

我がうきよりぬべし。仁者ハ能人をよくみもしよ
く人をにくうんするといへるもこれをおもへるべし。又
子期きゝて白牙が琴のねをしりたり。是を人
をしるとおもへりとを友をえらんとおもへ
鍾子をえらよといへるにして肝にて詞なれ。天台
にも善友親近をまつ一とすと云。因縁生のゆゑに
自性なしといへり

「人の中ゆるは哥連歌にいろ清あやしれたるは
きえひとの耳にも面白覚ゆらんこそ心ゆるれと
きるはゆかしいつもの心もこゝろさしわきてさうひに

入らぬ人の知べきにあらず。不知の事も詞句
手懐紙なりせハさしてそゆうめ。常にうう幽玄の心
をたがひに人の覚り知べきやゆるざらん

「定家卿の哥ハ深ハ朧月夜に化女の面影ある歌
まてきしらせさらん句ひぬべし。などいふなるらん。

「人丸赤人の哥をも只其人のわよめて見ゆうや。
我よ清人のめよ玄妙不可説哥なるべし。杜子
美か詩をもこゝる人をしるといへるなりけん。佛の法

「ふじん五子の上慢は遠をまぬかれ立ゆれり。
應身報身まくれいとよひ。法身にいたりて終く

なべし世はなべてかれめのみす作者を第一の人とや
侍らんや。又よき人ハほまれありぬべうかなるは
ものもちやされぬかし。先達なし。大むね世人
のめさるとて、あらゆる作者どもこそ侍らめされどもい
かさま人すら誉めらんも徐よき人ならべし。人
おほくも聖仁ならこそ恥しきぬれてハ侍道じ
よき人のをしもてられぬる昔よりおほしけれ
されだの道人はおもハれざるをされべきれ。人を思ふざ
るをうれへよかしいそり。孔子も時にあハずしいうる不
女卿人の善者好之其不善者悪之。佛の法名なるよ

も三億の人ハきかざと云。洞庭の松のひとり老ゆた
ぐりのをハいかにとてかさのひに入侍らんや。人の身侍
しハ法の門に入て心の源を明めんかも此花をま
なびく哀ありきよきをもしんにて此花をとのを
色物とみのこざはく乃文にふ実り実をたしく。
まかさりまみまりなき人の中にハれがかりけれて
ありがたくこそ侍らし。佛も山海をさへして独山深
入なせの流りすかいかもし里に鳥の巣なしと侍り。
詩みも秀句ハ閑家の人のなちいにとしいらるれん。
閑居幽栖の棲こそなくしも常にいとすめして。

終りの夜よくの折ふし向ひて世の中は幻のうちに去来
まる事も分じうれも賢も愚もいづれもをなじ
息のかよひがたきをとゞめらしむるはきも我よのこゝろの
みて百とせ千とせとあふべきをならし久しまさに
名をめでつかうぐさ御くとちりまどひぬるこそ
を?られて此身は土灰となれ次に枝息の一もうぢ
いつらみのも行しんが我のことなしず万象のとれきる
見しうらはされかわ事こそ尋ねきつあしく侍れ
人のよ侍りは句作するくとして前座とらぬ
らぬやうに稽古をとぐべきにて侍るといふこと大やう

座にある時に志をすゝめて侍れば、さも聞ゆ
きけるべし。されども此人にはたゞくくは
いかでか侍らん。発句に案じ入りて出しまほしく
はる人は玉のたふに光を放つ花の句をよみて
むるまことの法なるべし。大聖文殊の化身などいはるゝ
侍るぞやもとしとおく出べき法とは見しらぬこそは
よしあしの分別もなくえんよちのりきぬと
志うつさしん業は座する事なれべし。紀貫之は一首を
廿日に詠ぜしと也。定家卿は血をはきしとぞいふ。
公任卿のかの人の此哥をそしりしとせまくし業にてありし長能。

陰経にハ寿を経ざれバ死もせず。死も是れ潘岳がいふん也。
詩を沈思して三十まで白翁となれるを遊ぶ仏法より
最上醍醐味といへるも。いるも。称まるやうに故へし
調にハいかにも世に交て身のおもきれしも思ひ知るかや
古人詩作しぞれしも人のやうよう作べきかやひとへに
名をおもひ身のさかへにむかうけぬる人ありて又さうしり
いまるに付て閑居をこのむ心を後を人もあり。
定家卿の寄をいさめてもされ侍るとかん寄ハ
さやうにとれわりのまゐられ灯かげうかしろく
酒さかれちらしていひでき給ふ也。されハ海之寄

地下の身ながらもんこ文にかよへぬるひしとそ誠に
秀逸もおきぬべきれ。深文まことの池かそくなるかな
きこのよむものひたがしれぬすけるうらなけ。ある
きなかし耳までひき入まひ胸息なよりけ。朽史
桶をいつき詠吟の心思ひやうみつく。夜さけ
人まつゆきわる身にはくらうるふさきよこゝ
かかに又れとおもんはどとくに出入まへ入る凄。背羅
とそ侍る。さるやのあ乱郷をおそしさのへま
どもの流るの又十そ人かせみしのそうれまると
かんを御書のに詞に。当時の帝化安下なり

はやわくるとかうしせるとなりん。定家卿の
を案じまへるすなびんとかゝてあたなはしと也。
たかう家ゐて威儀をたゞしゐたまひけれん。
ましてはいれかほとりの輩。人の身連歌大かたには
きゝえてあくの物をとらへ給へはすぐに此こともある
まゝ給へきことや。誠に昔より先達も終にいづれの道にも
わか経ちら上はるかに知りつきましこと也。を修せる
れよくる事沈思せし句など只かなしくと
ふかく毎に作者の志ありはちかひぬるより給
悔しきべく哥道の上にも上手人のすらそ給也

ども心分別修行もわきまへぬに道の義かゝき人はおほ
かけまくもかしこきことし也。況の哥道にも。を
眼をみてさらに道に入事と古人も侍也。
都に鄙人なども侍るに其名匠の座にまじはり
井てきし侍などして言葉も侍らんで。後百年も
みちびきし誰よ育ても才能をすへわるらず。を
人のやかた為手に胸の中をはらし侍らず他人
の室の中に朝夕わすらぬべし。此道は故実を談す
ることを窮めぬべし。俊成卿も申されし給とされた
数寄愚鈍の人は千ちひかりて不便才ても牛のおま

おしきりて琴(こと)をもならふべし
此道稽古(けいこ)をはげみては。後(のち)打(うち)時(とき)ても乱(?)る
くやうなん。蛍雪(けいせつ)のしたしとつきても勝(しよう)り工夫(くふう)ながく
ゆるくゆくハ惑(わく)なくてうるべきりや。文(わざ)みし一日よ
二弟兄(きやうだい)となるり見んよりもあり。此法世(よ)一乃尺八(しやくはち)ふく
縁(えん)何といへる者(ものゝ)かう(?)作し。三日のうちに打(うち)時(とき)作らるが
なしとりふ。もろく人ハ。もしんじて作らんす
ぬべしとおもん。又梵河(ぼんわ)庵(あん)寄(?)なりとよみがへて(?)
よ津ろうに膝(ひざ)をえしく(?)をひて後(のち)ほど(?)り
坐(ざ)て此法ハいらに跡(あと)も蔵(?)らんと人よ作れバ

まてうるまどを作らん。上げん(?)ハ座(ざ)よ分紀(?)けて(?)
あらく作れとすさりしとおもれも後(のち)ぞうなる
梅紀(?)村(こくう?)なる
部(?)などの人ハうがるよ聴(いさゝ)もかゝりるをるを
が聴(?)もみそる事もしかあつりハうし。ウカ紀(ちう?)よ
基べし。されう人ハ敢うの心(?)姿(すがた)を胸(むね)中(うち)よ作る
め作り。塩(えん)紙(わう)の人ハ天(てん)よちしけてのがる(?)外(ぐわい)のゝ
とめべし。作るべし。我胸(むね)のかれはをとらしやむ
ひめるハ愚(けん)なるべし。清岩(せいがん)和尚(おしやう)常に申されしと
なん。我寄(ね?)ハよろくるべし。毎(まいく)人の寄とうと返(?)しく

兼じ侍従なとかしこきうたならば
先達の措し残りし工夫なくも侍りなば
句の心にてよその一字をもそへらぬ折越遠編
廻文歌句のうち侍の人の付侍らんまで覚悟
なくく百韻を作りまで前後をしらん人のとは
一句のうへのときうしなはん事は手がらなるべし。
小野道風が手跡も五拾の後は世に知人なりき
しといへり。佛法の顕教密融にして万象
を捨ざる大はさとりの分別の外なるべし
凡俗なる句と中むゆかる姿にて侍らん

姿といふもの凡俗侍べし姿の凡俗はきこえし座すく。
心の凡俗はもとこし手がらや侍らん。
松らんとらん古今の座と云り
是は姿も侍らふ風を月見んなどわかるく
や侍らんぞ此の人にも小松らへを見て夏きおして
月うんとなかこと侍らん
色くまとよるへもいうけひざの秋
ひとへは世勢をかんへも凡俗也。
是はそこいづれの草もわりれなるを

七草などか二菜か三菜雪よりもえいづるやうに
こそえんに侍るに。是はいづれをとりわけもせり
ともしらる卑下也
我人ハ同列にて人の口羽をかうすならしき
まして中々やはや連歌なといふ侍らへきや。先途か
たゞ侍しや中にも此ままにとは沙汰背づきよ
やうなき中の人などかはかる句を一字二字かへ
てとるハ分侍られん。まゝに我物にしされば口さ
しやうき人の志みとかりて云出しける句も
跡かたなくかりて作者の作也。不便の事也。

古人ハ文は円しめ中侍られん。有家ハ松や
梅をとり中されけるに。年をかさねて後誹諧ハ是
ひとのやうをせ中侍也。名物をハ其ことの詩仙
卑下のましとて雅をとひ事へ抗とられん。
君ふめでゞ花みしゆるすはしらる
ちるをみてもまよすとはしらる
又云
花といでてもよるもさかりにみえれ
梅の花わぬよらしもさかりにみえれ
桃いづれとさ花みの侍きん。不便の事也。ばかりの

玄妙の句までも得意ならぬ人のおもしろき約束。
唯人の知をいひつぎ古法なるべし
都まで花をられまれの外重られ
山ちらしき数ハまれの外重られ
此句ぞ聞わけし得たる合作しつるをもまりて人の心
とならすべき作者に得しねバ中くめづらしきか
又作りてくむかれより心の哀を分別あるべきもの也
発句ハ心を得がよて噺よきうひに入て道あるとも艶ひ
作りなる連歌とかあり面しき座ならん。此句常より
見あし作りやかれ入がたき姿の入得らるべし

木枯きほや霜の津まぢれさかりし風
此ほハ長く浦しきよりの人の句也。されどもを
ちじめ文字いますこし入がたかるべし。清しよ
きりをとわさくざしのびく見し作るべきかな紀
まで木枯きほもよ続しつる次
霰霙や春の雨かな 秋きんち非
此句ハすこし姿いよもみるべく得がたかるべし。こ
きつの姿あつかう文体も見く分別あるべき事。
哥よふ。本来紀よてさし得し趣あり。連歌ちか
此紀よりて作るべき座ならん。此句雑くよ噺し得たる

なんぼうにもおかしう侍べき事也
ふりしく世に天がしたへ花の雪
郭公まちしは秋の月見かれ
此紫の女ばうの句。未来記完了なるべし
又哥には悲心狂夫といふ事ありて万葉集よりはじ
まりし作り。連哥にはいはず。此詞おほく用ゆ
作り。花哥によるも躰。連哥の道に慮ども
かたはべりし次
月夜ごろかのおもしろき香も朝
花やちくあなた山にうげいも

かゝりの風体悲心狂夫なれば拾遺しられん
哥には親句疎句とて二の躰あり。連哥にはなき
よしや。此より文字がらの上へに句の付やうありと
どもる也。哥には疎句に秀哥おほかりしと定家卿
ちじめとしても志れぬ世の中
和泉の原によせくるかはりし流
まきやかぜやにおもふまく
いまげきれ光のまつの松がいろ
前句の心詞をうつしていまゐ付る也
たれく此句の句志る人よひまあり

独句の事

里遠き八幡の鳥のねぐらにも花の香送る春の山風　宗祇

さつと来て人の心をうらみけり山寺八月でさや花　[illegible]

鷺のおりる池の汀の松ありて梢のかれの見えしそれ　宗牧

まことなき人のつれなき夕暮ねねよわき時す付るる　[illegible]

雁のなく風の吹き音を木枯に月の夜ぞ露の最期の路　正徹

たれしか木の葉のひの事いふの時升志ふとにめぐらず。

親句付やうはねのわけ也。

あはりの上によみならぶる

さゆりの秋の月の影あらしに先すゝき　良保

わりし御しさを今迄ならぬなり　月

浮島の里のあかりを田ゐにして

親句疎句の見所をわきまへ侍べし是ひとつに深くよ

おもひ侍らバ是のかなふべし。

一　事に篇序題曲流といふ事侍り。連歌に

もあるべきや。先達語侍し。此事を連歌の才用

ぬべし。仮令下句に曲のかはりバ上の句を篇序題

あらして流のことをべし。又上の句に曲のかはりて

よみし下の句を紙篇序題に引となる云ふ事也。

花もむかひもさと何しむ何種

月のうち俳諧の雪の翁ぼうけ　杉山

遠しる田をまいえとなり

足引の山かり雲を払ふ秋ハきそく　仙化

おほととけても雪ハ手にあり

ちとう俳諧の花の下をとひ　嵐覚

此三句ハおの下の句に曲のある故へに付句を篇序

題としてハひのとして前の句にゆづり侍り

雨乾のちなくなりてその形しまれ　良何

花見し山のゆふられの雲

おもし語口中河わる宗の扇

いでゝ入ゝくらぐく月をまちてみん　信徳

此二句ハ前の句に曲のかわりて。まみする種に

下の句を篇序題として。ひゞきしたる計

也。連歌ハ必上の句をのべしくて。下の句にゆだね也。

下の句よりひらくもじして。上の句にいはせつべ

きものしたるよし。はじめくにひらきてくる句に

八歳情秀送なるべしといへり。寄らすハ田と二示

にいらくもく。おほく序の詞をもの寄する詞

をつき物也。是を見覚なくバ。秀逸とも

おしのふおもひさけ置くや。綺みも序正流

通るなり。此序分に於くれは因縁譬喩を説
く。後に正宗分あり。其経の眼を云て末に
流通分あり。其経の徳を多くにいひひろむ次
也。此れ等人も去る事に付れ九哥の篇序
題與流に叶侍り。詩にも起承轉合といへる
ためしあれば、哥も序を破
急に分くる差しるあり。昔は短尺に詠ずと
見えたり。序の哥おほく雪とも侍り
時鳥鳴や五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな
敷嶋や[illegible]

山城の淀の若菰かりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき
陸奥のあさかの沼の花かつみかつみる人に恋やわたらん
吉野川岩波高く行水のはやくぞ人を思ひそめてし
又中の句にやともあしき詞どもおほく置るもの見
え侍り
[illegible]
伊駒山嵐の秋の色に[illegible]
[illegible]
[illegible]
一 旅の人 古人の句など此風情有と見え侍り

神のいがきりひくしめをも行り
此桜むしえの日ハよみねうしめ縄　信照
うけしゝ夢のわすれくしそ見ゆ
桜まとり荷さ花の若根う津の山　周何
ゆらゆらうきてよしにち河ここく
入江のかるでしき世中
此次の糸ぐひ志る流りいとは波のうす
哥ハ六義とてその姿をさしもも連歌は
さわる波じこまりや先達活わし由緒
六義のゆるごとにまよくきぬ句よまして大旨

肌もくし
風　うへ哥の心
名をなくしてよはらへ物し郭公
二條大閤様を郭公にそへて抹摘志する数
寄しやようへと句のゆ波肌を風の句なるべし
賊　かぞへ哥の心
あ須日ハ吉野乃家よ成りぬら　叔昧
花ハ物ごとに色紙さがりて通じもなるべし
こまやのに心をとむ紙乃句なるべし
比　なぞらへ哥の心

下もみぢ地里にまじる宮井小日

塵の字と塵に作なして。かぞへるなるべし

興　たとへ哥乃心

五月雨ハ聲の松風谷乃水　日

是ハ聲を物によそへつゞきあるを見あらはしずなし

あまりそよつてる興の句なるべし

雅　たゞこと哥乃心

なり果しも花の秋よいかなりにけり　同

きらかよいひよる句也。所々めづらしさもなし

くらべぬ雅乃句なり

頌　いはひ哥乃心

花躑躅みつけなき乃見きりかれ　成阿

かめ祝ぞるのなるべし。頌の句也。古今集のる

序の小町ずんば。頌乃哥に神祇の心あるべしと

いへり。其小町も役によめる人の書くてる詞と又

里義なり。伝書ハ演義ともに口伝などゝて雅

をうへかり。作者口伝なるよし也。狂名を本姫と

りて此發句元ハ志あし。侍なり

歌には代く歌合として。作者乃名なかりしとく。

当座ハさるくのやりんよめひあま也のはさ乃

ながまでも。めでしめ志る也。連歌ハ。侍ひ

ふりのまゝ背まじききよや。殊に連歌にをいて今ま
できかゝり用心あるべき人に。いつはる初心不堪の輩
もつぱら老功の行所をよしとせし見をきゝ侍りや。何さし
うに如何侍ると也。近来初心連歌を寄るにごとく
評議によけて。高座しく澄しくれ知り顔んにて。
勝負を付侍るまり。せびくならしやう賤
人の清きてもてあそばれ花の色よりもぬべく
や侍らん
發句の道は猶いまゝまでも相続ことぶく落侍る。
連歌の道はいかであるべきまゝに侍らん。是非

の事は晩学にかゝはらずさしおき侍る人あり。
されど背かなるや。此たびひとへに閑心の翫なる
ゆへに。年来自らも功により侍りき。况んや初心連歌の
をさめいでくれるをかべし。いかにも老後より誠の秀句は
出来侍べき也。家隆卿は八十に至て名誉の秀歌侍ると
なり。孔子も四十にして。まどはずと也。宋史七十
にして学に至て師僧にかゝる。漸に猶吟成侍て文
に志すをも可也と。都得よりの心は連歌を吟侍
る。史に修りて工史の心よりそ見しとて侍りしが不心
されあへざるを道也。殊に世にみちてよろしからぬ

己をほこるきのハ尊し侍る也。ひとへに舌の上の囀
とぬて。賦の修りを弥しく侍らん。されバ千の
ほとり市の中に千句万句とて耳にみてり遍く
たよいきる蒙も。此世をてらるよすがにかしく。
目く叢くに乱あひわるむかし也。諸花の雑説果
まあひ叶ふ砌る時也。志のハ何さいとも猶ごとも一
念即種の上に侍るハ。煩悩も不縁し。めでたやか
たかもさんがしきも。唯同を尉めや箸をなし
遍し。佛のさかぐれ方便みてく門へ引入ごとく。
誰もこれに入るにあらず。蒙をさわるかとこと

く劣かるをバまつの侍るが。智門世門のことく
其人の運否に任すべきことなるべし。佛も孔子
も人丸も救がたきぬべしとあり。諦みて随
縁生性不受不同と説り。此花ハ凡應長の比よ
り世に盛に弘まりて侍り。其頃の先達と覚侍
る。善阿法師也。此門弟順覚信照救済法師
ど。其後貞治應安の比ハひとへに救済法師
此花の匠也。此門弟周阿法師崇眼などして座人
おほしかりけり。此後本まりて後應永の比
より梵灯庵主此花のとりしめ人侍り

氷ある夢の川の秋の月　能阿

背山の西よつ道あす九木紫かゝれ　日

去年の木はるハ。専下。波底。巴象乃花場の和何

おどろ。心も浮く詞も遊さしく待りれん。

おけ荒萩りかのおきて夕暮。波底

風ゆるし花かうびきあ以ふ　日

流むかまげ为をとくそね行られ　能阿

松の影いおもしどのわれ志られ。日

其後永享の頃ちは世よ志られぬる宗砌法師

智蘊おどし。波木清岩和尚乃下に久く

侍りし哥の道をも志置るゝや。志法よりも連哥の

花御殿さるをおこすもと見えて侍り。

春にして雪雪にかすむ。ましかれ。宗砌

わかぜれ松をとうし風秋のわ。日

霜松乃雪の櫻の何紙あかゝれ　智蘊

長月や山高の松の志らし。られ　日

波木身済りて後。花文くく如何とおん。

を清き岩から奇なし光も消待まいば。

又うきられぬるこその影しられ。折の影の嘆

き人のおどもいづれの光とつきぬの出るべきとひ

ての末の世まで見ねとも聞し侍らん。是なる河
原の流るるとぞ見んしかし。まさに雪のいでんとせん
しぶちに世に一度なれども其れの人の跡つよく待侍り
む。只る道わしるの世ひとりならず思しくても老ごしく
も侍る。これさわぐの跡なりしても若の露夕の
雲の消なれどもの為りに生ぬ。ちかれどもさすがにおな
るかな。佛の御法をおもふにかなふ心の道は。凡に凡ぬ
おとろやかにしたとてもかくしらんにはいかに今
来すべき一大事因縁を為あてめ。生死をまぬ
捨て侍るも。往生のひかりの法を待くるまに入

侍らんまし。千変にひてし仏の心を侍られ。志のは
わきどかく〳〵ひとつ見侍れば。道の法の門か
出家せし。おもく凡夫の満て侍りど。さ睡ぐくれ
便の門にまどひて。自の前の十界を忘れ。二世にめ
られども人をそなへに侍れ。それはわきまへる
る眼より八同一仏。それはわやまちを死なむべしとて
より大虚をひとしき胸のうちなれば。げにも
の尤を深くひわる法を法とあかくし。まことにぬ
御死にあらず。二世をめぐる凡万法あり。唯がゞ
わしの理のよそなく理のみぞ事しぎれ

乃不思議なり。それも刹那法に何をむかうしの
心ばくしや。何よりもおもわくされん
古人乃句がく

幽玄句

神垣のさびしさ沼乃みの佐かく
蓑日野の人なる山乃雲がすみ　頓覚

さらにを海老とひしかくる山
なり紀伊よひらがもふ宗の落　敷衍

白にとなかまで人の松すまく
萩ふく風りも松もうりなり　臥何

風の音もさてでさびしき夕かれ
秋ぞ幸じ人ともゆみで紀物哉
まかれなりへハあそこあり寺哉　敷衍

松風もあづのみしへとのこすまん　同

長高句

かぞふかぞうに家むすぶ所り
春雨りともめ蕨乃手紙おく　頓覚

わらわにう紙きや海ハ志られぞ
和乃色ら紀ぞしれ三桜や二子年　頓覚

花志れ家ち　と夜ぞたまきこへせり　周何

霞の猿の無紀三ヶ月まくら人　良何

田紙なかくも咲く柴の戸の中

此山の雨ハたれしらす夜ぬうらく　信照

川の波みよ花ぶのとま涌

兄よし我乃夏に添ふての遅桜　十弘

背凡の句

まれなり山のさむさ中よ寒・

雪ふくて此川上ハさむさ哉・　教沢

老くりハまけるやよなやせん・

村の桜の世れ秋まで中よくれ　良何

ねしてはしね舟の流れ

都をちりまほのふりに日ハ暮て・　教沢

人よ声に谷めし二見山・

風うち添つまの山乃鉢夕り・　同

松やにうち炉するなるらん

とり火のめつき尖なる思ひとて　同

濃の句

みやかりて露と形うらん

まきれのこがわにせ添花乃枝

ききなをもとめしなひてこそしれる　信照

志らがかりおちこめ足や流木　良以
・去年(こぞ)よりも人のかずうちかさなき　数源
この苫(とま)屋ハひとりの柱(はしら)すく
舟(ふね)れうちすてゝ老(おい)よ愛ありの乎　数源
革(ききやう)れの實ひのみよおかれきく　吾河
いはるよら(へ)山中(やまなか)の月
さとしられいたきうせみえし客禮(きりうれ)た　数源

麗句(れいのく)

月をもいろれおかりたらけ
駒(こま)迎や山(やま)の木(こ)がらし吹(ふき)ゆく　良以

夢な夢(ゆめ)りきのこゝハもとね松乃陰(かげ)
衣(きぬ)やいかりの軒(のき)をとはゞん　信照
さむくきこゆるかうし浪(なみ)乃音(おと)
鵠(ごめ)なくひ秋のいりにあけぬらん　数源
泉(いづみ)すゞしや雲風(まうぜ)ぞ吹く
住吉(すみよし)乃うらなみ嶋(しま)よ月更(ふけ)ゆく　白
清(きよ)きかね命(いのち)ありて花をさかせてく
かきて豆(の)つゞりの上出(ひ)の音(ね)　良以

面白(おもしろき)句

あらかしけらを夜(よ)紙のかれぬる

見どころの志ゞまでぞみせ姉が抜く

砧乃をとぞ寒くきこゆれ　政河

秋さびし峯乃庵り人すみて

木ずゑにのぼる嵐乃志ら露　信照

山のはれ松のねもとゞ月いでて

ほりそめしこそ空のうすれ　教海

老ぬれバにぞげなき身しむかし哉

人の杖こそわかくも見えし寝れ　同

松まぎらしきれ乃縄よてぞ秋のかく

草の志ろべき句

人はうハさんたゞふると行し

花乃ほたのもとゞあまの紀喜乃菜　立圃

波よひし屋と里にてそ行道

ちぬめて菜の浮賤にゆきつ迄で　同

かこうねと寄や鐘もぞ如ねるん

廉乃ねきりかゆよぐれ沈やす　同

くゆるあて残り飛やきれん

身を捨る朱乃庵の夕かすり　信照

芸面にたれバ浦ましに塩やりで

舟よふもれ浮わ紙てきくわ　以覚

一節の句

・浪乃色もうでのうれ手井

行ゆくりかハ浮う紀名れ立田河　信照

うき人竜う寸紀菜乃もみぢ゛

人心おりひわりわね色見えしく　信照

年暮て住小野よ清ぐ名東とられ

・雞波漢ちハ色紙き清く一路　十江

もり日影とぶ麗そ来るそり

あ名まで㐂いひし命れいきれ松　叔海

いよりそうふ紀て之ほそりで

入江乃なりまでかうき世乃中　日

寫古の句

雪花かつめく山と云ふ見道　・

富士乃根ら人のこゝろしゆりしくで　岱克

上下をさゝむる君がまつりごと

もしどお海賀茂川乃みづ　盈何

いはつり打日さ筆乃ゆとる

絵よりけ浮花もし紅葉しとえハすく　良何

見じうれなれハ彩りかりしり

子づかのも社乃土名のかしの和し　乳滝

をごるづにはとあざけらん
寺ちのきあすの里に住かげり　十弘

強力の句

婦しれのむかり足ゆるうげなき
あまり武神代久しく紀文つゝ　赦海
いのちおしへば末ずり見しかゝき
老のはやりゐぐきのずとあらけ賊　十弘
かねてとふ色紀日紙书しぬるす
ばかる鳴べき月いさらぎまゝしざめ　信照
弓矢ず虫のおさあとえめる

かくし多つ秋の山田とうり上げん　周阿
鳴ぐげもれのがねぐるといそぐ虫
霜をしゑへくさまねこ乃日あし　赦海

住吉の小町こそ登照し給ずれ唯やまうよ
すゝ筆に倩かせく傍鉾也球まやみのう
津くよらも杣ばはりた紀まけ者也

はゝめかれしの数ぐさ　上